おもしろノート

多摩の野鳥たち　11

国松　俊英

ヒバリ

恋・縄張り主張・上機嫌、歌い分け

暖かくなると、多摩川の空でヒバリがさえずります。上空でちぎれんばかりにつばさをはばたかせ、鳴いているのを見るとうれしくなります。しかし、最近はヒバリを見ることが少なくなりました。

私が子どもの頃、家の近くにはヒバリがたくさんいました。麦畑があちこちにあり、草はらもありました。春から初夏にはヒバリがそこかしこに巣を作っていたのです。ヒバリが空から舞い下りてくると、下りた地点の近くに巣があるだろうと狙いをつけ、走っていきました。けれど巣はなかなか見つけられませんでした。

ヒバリは、麦畑、畑、草はら、河川敷などを好み、地上を歩いて草の種や昆虫を探します。草の根元などに枯れ草を材料にしておわん型の巣を作り、3～5個の卵を産みます。ひなを育てている時はとても用心深く、上空からまっすぐに巣に下りることはしません。少し離れた所に下り、まわりの様子をうかがいながら、巣まですばやく走っていきます。人間の子どもに、簡単に巣など見つけられるわけはなかったのです。

ヒバリはすばらしい歌い手です。「ピィピィピィ　リリリリ　ピリリリ　リィリィ　ピリピリ」などと聞こえる鳴き方で長くさえずります。高い空でさえずっているのを見ると、この鳥は歌うために生まれてきたんだな、と思ってしまいます。ヒバリはいろんな歌のレパートリーを持っています。縄張りを主張する歌、恋の歌、浮かれ歌など、その時々により歌い分けています。たいしたものです。

ヒバリは古くから多くの人に愛されて、詩歌に詠まれてきました。万葉集にも出てきますし、芭蕉も一茶も子規もヒバリの俳句を詠んでいます。宮沢賢治もヒバリのさえずりが好きで、さえずる様子を詩にとても個性的に表現しました。詩人の三好達治が書いた「揚げ雲雀」という詩を紹介します。

雲雀の井戸は天にある……
あれあれ／あんなに雲雀は
いそいそと　水を汲みに舞
ひ上がる／杳（はる）かに
澄んだ青空の　あちらこち
らに／おきき井戸の枢（く
るる）がなっている

ヒバリの井戸は天にあるとは、なんと巧みな表現でしょう。透明感がありすばらしいです。

前に、昔の人は野鳥を捕らえてさかんに食べたと書きました。ヒバリも食べられていました。野鳥研究家の老田敬吉は、こんな話を書き残しています。

飛騨・高山地方ではヒバリの焼き鳥はとてもご馳走でした。結婚式の料理には、串に刺して焼いたヒバリが出てきました。ヒバリの後ろ指の爪はとても長く、他の小鳥の3倍ほどあります。ヒバリの焼き鳥を出す時には、ヒバリだという証拠を示すために片一方の脚をつけたまま焼いて出したそうです。

高山地方ではヒバリを多く捕れません。数が不足した時にはスズメを焼きました。そしてスズメの脚の片方に、ヒバリの脚をうまく差し込みヒバリに見せかけたのです。それがテーブルに出ました。これなら、十羽のヒバリから二十羽の料理を出すことができます。

何も知らないお客は「今日のヒバリは、うまかったな」と喜んで帰っていきました。

◇

第8回のスズメを読んだ方からたくさん電話など頂きました。ロンドンのイエスズメが姿を消したこと、日本のスズメの数が減っていることなどを、もっとよく知りたいということでした。私が書いた本『スズメの大研究』（PHP研究所）を読んで頂ければ、そのあたりのことが少しわかると思います。

（児童文学作家・日本野鳥の会会員　＝町田市在住）

藤富　敦郎さん撮影

イラスト・望月　聖子

野鳥の聞きなし

野鳥のさえずりを、わかりやすい言葉や語句に置き換えて表現したものをいいます。

《ヒバリ》
「日一歩　日一歩　利取る」

ヒバリは太陽にお金を貸しましたが、返してもらっていないので、利子を取るぞと鳴きながら飛んでいるというのです。

《メジロ》
「長兵衛　忠兵衛　長忠兵衛」

《ツバメ》
「泥食って土食ってしぶーい」

《ホオジロ》
「一筆啓上つかまつり候」

「源平つつじ　白つつじ」

《コジュケイ》
「ちょっとこーい　ちょっとこーい」

《ホトトギス》
「特許許可局」

《センダイムシクイ》
「焼酎一ぱいグイー」